

別記  
第3号様式

京都府教育委員会教育長 様

令和 8年 3月13日

コミュニティ名 幼小かけはしプロジェクト  
代表者所属名 長岡京市立神足小学校  
代表者職・氏名 教諭・福島 文

京都府若手教職員学び合いのコミュニティ育成支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 コミュニティ名

幼小かけはしプロジェクト

2 研究テーマ

幼児教育と小学校教育の円滑な接続と幼児教育での育ちを学びに活かす授業改善の在り方について

3 研究の目的

今年度から全国の自治体で本格実施となる「幼保小の架け橋プログラム」については、小学校入学当初の教師の指導方法が変わり、子供の主体的な姿がより見られるようになってきているなどの成果が上がっている。一方で、各地域において幼保小の関係者が連携・協働し子供の発達や学びの連続性を確保したカリキュラムの実施や教育方法の改善などが必要であるとされている。

そこで、京都教育大学古賀松香教授のもとで現職教職員長期研修生として幼児教育を学んだ教員が集まり、幼小の円滑な接続について学びを継続し実践したことを、校内、市町や府内に広め、幼保連携の理解推進に寄与する役割を果たす。

4 研究の成果と課題

- ・ 幼児期の育ちを小学校以降の学びに生かす授業改善について研究・実践・交流を行い、自身の資質・能力の向上につなげることができた。
- ・ 幼小かけはしプロジェクトの研究会を通して、個々の研究を共有・協議する

ことで、情報更新の機会を得るとともに、個人で進めがちな研究を支援合う場となり、研究に取り組む上での心理的な支えを得ることができた。

- ・ 架け橋期の取組について、担当者以外の教員がその意義や内容を十分に理解し、校内で共有していくことの難しさが見られた。
- ・ 取組を持続可能なものとするため、今年度の実践内容や交流活動の流れ、校外学習届等の資料を校務支援システムに整理・蓄積し、校内で共有できる仕組みを整えていく必要がある。また、幼小かけはしコミュニティーメンバーを拡充し、実践の成果を広く共有することで、取組の理解と広がりを図っていきたい。

## 5 研究成果の波及方法

- ・ 近隣の園とも連携を図り、幼児教育からの育ちや学びを小学校教育につなぐ視点で校内研修等を企画し、コーディネーターとして活動する。（自校～中学校ブロックのイメージ）
- ・ 各教育局、市町教育委員会等が主催する研修会等で講師を務める。（市町～局での活動のため、教育委員会や教育局等との連携が必要）

## 6 研究（活動）実績\*

年月	研究（活動）内容（具体的に記載）	活動場所
令和7年 8月6日	1学期の実践を持ち寄り、実践交流会	府庁別館 会議室
令和7年 11月13日	令和6・7年度 京都府公立幼稚園・こども園教育研究会研究指定園 研究発表会	城陽市立富野幼稚園
令和8年 2月6日	令和7年度楊梅幼稚園・下京雅小学校教育研究発表会	京都市立下京雅小学校・楊梅幼稚園
令和8年 3月6日	今年度長期研修生報告会への参加	オンライン
通年	京都府幼児教育センターからの情報提供	オンライン

## 7 予算執行状況

- (1) 旅費は、旅費執行状況報告書に記載のとおり
- (2) 図書については、受領書のとおり

8 他校へ勧めたい実践又は他校へ呼びかけたい共同研究（できるだけ具体的に）

テーマ	幼小接続
育てたい資質能力	<p>10の姿：言葉による伝え合い 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚 社会生活との関わり</p>
実践又は研究の 具体的内容	<p>・えがおちゃんタイム（登校後～朝の会） 4月のめあてを「安心して過ごすこと」とし、その実現に向けて、朝休みを約20分延長し、幼児教育で慣れ親しんできた遊びの時間を設定した。遊びを通した関わりを大切にすることで、新しい環境に慣れたり、友達とのつながりを広げたりすることをねらいとした。</p> <p>また、各教科においても環境の工夫を意識し、遊びと学びがつながるような活動を取り入れた。特に環境構成においては、1年生が「なんだかおもしろそうだな」と感じ、自ら関わりたくなるような場づくりを意識して指導を行った。子どもたちの思いや気付きと、教師の願いやねらいの双方を大切にしながら、学びを進めていった。</p> <p>・生活科「いくぞ！がっこうたんけんたい」～国語・算数科「ひらがな・すうじたんけんにいこう！」～ 生活科の学校探検の学習の終了後に、国語科のひらがな・カタカナの学習や、算数科の数の学習（1～10）と関連付けて、校内の文字や数字を探す活動を行った。タブレットの操作方法やアプリの使い方の指導もあわせて行いながら、遊びの要素を取り入れて継続的に実施したことで、特別支援学級在籍児童3名を含め、子どもたちが見通しをもって意欲的に学習に取り組む姿が見られた。</p> <p>また、年長児の頃にサークルタイムによる話し合い活動を経験していたことを生かし、入学直後の時期には終わりの会をサークルタイム形式で実施した。互いの顔が見える配置で話し合うことで、安心して話したり、友達の話に耳を傾けたりする姿が見られた。</p> <p>・架け橋チーム会議 幼小交流を年3回実施し、各交流の前後には事前研修・事後研修を行った。事前研修では、互惠性のある学びとなるよう交流のねらいや内容を確認した。これらの取組を通して、幼小間の顔の見える関係づくりが進み、日常的に相談し合える関係の基盤が形成された。また、本取組は幼小交流の在り方を見直す契機ともなり、単発的なイベントと</p>

	<p>しての交流から、幼児期から小学校への学びの連続性を意識した取組へと視点が広がりつつある。さらに、役割分担を行いながら活動を進めたことで、関係者がそれぞれの役割を意識し、協働して取組を進めようとする姿も見られるようになった。</p>
--	--